

としょぶらり

米子高専図書館報

ISSN 1344 - 5634

第104号

平成30年2月13日 発行
米子工業高等専門学校図書館

図書館でワクワク

校長 氷室 昭三

学生のころ量子論の授業を受けたのですが、よく理解できませんでした。それで、図書館に通い、さまざまな本を読んで当時の人の気持ちになって紐解いていきました。プランクの気持ち、ボーアの喜び、ハイゼンベルグの考え方などを想いながら彼らが示している式をトレースしました。調べている中で長岡半太郎という日本人が出てきて驚きました。当時トムソンの原子モデル(スイカを原子とするとスイカの種が電子であるようなモデル)に注目が集まっていましたが、長岡は土星型の原子モデルを提唱しています。しかし、長岡のモデルは、電子が光を放ってエネルギーを消費すると電子は原子核に引きつけられてしまうという理由で注目されていません。その後、トムソンの弟子であるラザフォードが、金箔にアルファ線を照射する実験から長岡と似たようなモデルを提唱するのです。ちなみに長岡は湯川秀樹をノーベル賞に推薦した人でもあります。

2017年5月17日の防災避難訓練のときに寺田寅彦の話をしました。覚えていますか。彼は明治11年に生まれ、明治29年に第五高等学校に入学しています。この

学校は今の熊本大学ですが、そこで出会った英語の先生が夏目漱石です。彼は夏目漱石にたいへん影響を与えたようで、「吾輩は猫である」とか「三四郎」の登場人物にもなっています。そのとき彼は、物理学の先生である田丸卓郎とも出会い、二人から大きな薫陶を受けたようで科学と文学を志しています。彼は、明治32年に東京帝国大学へ行き、長岡半太郎の教えを受けているのです。

寺田寅彦の「天災は忘れられたる頃来る」という言葉が有名ですが、彼のエッセイ集「科学と科学者のはなし」は我々に大変影響を与えています。その中の「津波と人間」の書き出しですが、「昭和8年3月3日の早朝に、東日本の太平洋沿岸に津波が襲来して、沿岸の小都市村落を片端からなぎ倒し洗い流し、そうして多数の人命と多額の財物を奪い去った。明治29年6月15日の同地方に起こったいわゆる三陸大津波とほぼ同様な自然現象が、約満37年後の今日再び繰り返されたのである。」と書いてあります。この後を読みたくありませんか。

彼は科学者と罹災者の立場から本を書いています。「われわれが人という生き物だから忘れる」ということと「科学が進歩したばかりにかえって被害が大きくなったことは否定できない」ことがわかります。みなさんもぜひ読んでこのことを考えてみてください。

図書館は、授業でわからなかったことをよく理解させてくれたり、いろいろな人の考え方や、ものの見方を教えてくれる場所です。みなさんもぜひ図書館に行ってワクワクしてみませんか。

目次

図書館でワクワク	1
2017年度校内読書感想文コンクール優秀作品発表	2
2017年度校内読書感想文コンクール講評	11
2017年度校内読書感想文コンクール表彰者について(記念撮影、審査結果)	13
平成29年度読書会を開催して	13
学生時代に読むとためになる本(教員推薦コーナー)	14
新着図書一覧(平成29年7月~平成30年1月)	16
「米子高専古文書の会」活動紹介	17
「身近な植物画」展開催の趣旨報告	18
ビブリオバトル高校生大会に参加して	18
2017年度米子高専文化セミナー報告	18

最優秀賞

「永遠の0」を読んで

機械工学科 1年 森田 紗代

私は読み始める前から、「永遠の0」は特攻について話であることをなんとなく知っていた。そのため「0」は零戦のことだと思ったが、「永遠」とは何を表しているのか気になって読み始めた。

終戦から六十年目の夏。佐伯健太郎と姉の慶子は特攻で亡くなった実の祖父である宮部久蔵の生涯を調べていた。ところが、祖父のかつての戦友たちは、祖父のことを凄腕を持ちながら生き残ることのみ執着するパイロットだったというのだ。天才だが臆病者。健太郎は祖父像の意外さに、もちろんショックを受けた。特に「臆病者」という言葉は重く残っていた。

しかし、元戦友たちの話を聞くほどに、宮部久蔵の真の姿が明らかになった。宮部はとても素敵な人だと思う。彼の「どんなに苦しくても生き延びる努力をしろ」という言葉や戦争によって人が亡くなるのを苦しむ姿から、彼は命の大切さをよく知っている人だということが分かる。また、宮部は戦争から逃げようとしていたのではなく、敵と闘いながら全力で生き残ろうとしていた。それは愛する妻と娘の生活を壊さないためだった。宮部は戦争の中でも愛を貫いたのだ。国のために死ぬことがすばらしいとされていた時代に命を大切に、生きて帰ることがどれほど苛酷なことだっただろう。それをやりとげようとした宮部。彼ほど美しい心を持った素敵な人はなかなかいないと思う。そんな宮部に私は生き残ってほしいと思ってしまった。しかし、冒頭で知らされていた通り、宮部は亡くなった。それでも宮部は妻と娘の元へ帰ってきた。宮部の思いを背負った大石が彼女たちを訪ねてきたのだ。「たとえ死んでも、それでも、ぼくは戻ってくる。生まれ変わっても、必ず君の元に戻ってくる」と妻に約束した宮部はこの約束を守るために、また、大石のように大学出身で優秀な人は戦後の日本に必要だと考えて大石を生かした。宮部は死ぬ直前まで妻と娘、そして日本を守ることを考えていた。宮部は最後まで素敵だった。

この本では宮部の生涯とともに戦時中の日本がどれだけ愚かなことをしたのか知ることができる。日本の軍隊は兵士の命を道具のように使う作戦を何度もとった。そのほとんどが無謀なものだった。中でも桜花のことが一番心に残った。桜花とは人間が操縦するロケット爆弾だ。アメリカのスミソニアン博物館に展示されている桜花はバカボム、つまりバカ爆弾と名付けられている。

確かに、人命軽視の思想が貫かれていた日本が作った、非人間的で最悪のバカな兵器だ。桜花だけでなく特攻作戦はすべてバカな作戦に違いない。しかし、その作戦で死んでいった人たちのことを考えると、あまりにも不憫で涙が止まらまかった。彼らは国のために死んでいったはずなのにバカと罵られている。本当にバカなのは彼らを戦場に送り出したエリート将校たちだ。

私はエリート将校たちに怒りを覚えた。日本軍が敵を撃つことのみ重視したため、零戦は次々と撃ち墜とされ、戦死者は二百三十万人も出た。二百三十万人の中の一人と考えると、その人の命は軽く感じるかもしれない。しかし、宮部が妻の松乃にとってただ一人の夫で、娘の清子にとってもただ一人の父親だったように、兵士たちにもかけがえのない人がいたかもしれない。その人たちを残して死ぬことがどれほど辛かっただろう。そして、残された人も悲しんだに違いない。国のために死んだからといって、かけがえのない人を失ったことに変わりない。エリート将校たちは兵士一人の命にどれだけ重みがあるのか考える気すらなかつただろう。人を人として見るのできなかった彼らは決して許されることのない過ちをおかした。

私はこの本を読み終えて、大きな衝撃を受けた。何も知らなかった。太平洋戦争について小学校と中学校でよく学んだつもりだったが、それだけが戦争ではなかった。教科書に書かれてなかった、兵士の心やエリート将校の心、そして戦争の実態を教えてくれた。ここで、タイトルの意味をもう一度考え直すと、「零戦が起こした悲劇を風化させない」という意味が込められているのではないだろうか。悲劇を二度と起こさないために、生き残った人は戦死した大勢の仲間の思いを背負って、辛い体験を掘り起こしながら語ってくれた。しかし、終戦から七十年以上も経って、戦争のことを語れる人はほとんどいなくなってしまった。だから、次は伝えられた世代が次の、また次の世代へと伝えていき、永遠に戦争を忘れないようにするべきだ。ぜひ、私と同じ、戦争を知らない世代に読んでもらい、戦争の実態を受けとめてほしい。戦争で出た多くの犠牲を無駄にしないために、私たちは平和を築いていかななくてはならない。

「心が叫びたがってるんだ。」を読んで

電気情報工学科 1年 草刈 美帆

私はこの夏、映画でも実写化された小説、「心が叫びたがってるんだ。」を読みました。この物語は主人公である成瀬順が幼い時、自分の口にした言葉で両親をはなればなれにしてしまったことから、自分の思っていること、心の叫びを人へ伝えられなくなるという序章から始まり、物語を展開していくにつれて、それを克服していくといった物語です。

「きもい」「うざい」など、現代の若い世代では、ふざけで言うことが多々あります。私を含め、私の周りでも仲の良い人同士で、そのような言葉を交わしているのが今の現状だと私は思っています。そしてそれは時に陰口、悪口へと変わることがあります。言葉はとても恐ろしいと思っています。1つの言葉に対してどう思うかは人それぞれ異なるからです。実際にそれが原因でいじめそれによる引き込み、自殺へとエスカレートしていったケースも多くあることでしょう。この物語の主人公は、過去の後悔からそういった「きもい」「うざい」などの言葉はダメだ!とり返しがつかなくなるんだ!と物語の中で語っていました。私はそれを見て、自分の言っていたことを見直してみました。私はよくふざけで先程挙げた言葉を言っていることに気づきました。陰で言うよりは、本人に直接言った方が相手にとっても良いだろうという勝手な解釈を自分で行っていました。逆に自分は言われても笑い飛ばしているレベルなので相手もそうであろうと自分の考えを相手に勝手に押し付けた考えをしていました。このことから私は相手の気持ちについて考えていないと思いました。私にとって良いことも相手にとって悪いことはたくさんあります。人それぞれに価値観がありそれを否定することはできません。だからこそ、相手の立場に立って考えることが大事だと思います。そうすれば嫌な思いをする人も減り、もっともっと楽しい会話で盛り上がるができると思います。

また、私はこの物語を通して「相手の気持ちをどう汲み取るか」ということについて考えました。この物語には主人公の気持ちをくみ取り、考え、いっしょに乗り越えてくれた人がいました。そのような存在こそが、一番大切な存在なのではないかと強く思いました。世の中、上辺だけの付き合いは友達同士の中でも多々あります。自分の本当に悩んでいること、意見そして意思を明確に信頼して友達に言えるかというのはとても悩ましいです。たくさん友達はあるけど、本当に信頼できる人が

いないという悩みを抱えている人もたくさんいることでしょう。そして逆の考えをすれば、自分は相手の気持ちをきちんと汲み取ることができるか・・・とても難しいところです。また、自分が信用していた人に裏切られる、信頼しているのは一方通行で相手からは信頼されていないなどたくさんの種類の問題があり、人それぞれ違った問題を持っていると思います。だからこそ大事なものは、「一人一人の相手を気遣う気持ち」だと思います。相手のことを考えて行動すること。ここからがまず第一歩だと私は思います。自分のことだけ押しつけているばかりの人を誰が信用、信頼するでしょう。きっと誰からも愛され信頼されている人に必ずあるものは先程挙げたような気持ち、つまりは「思いやり」です。思いやりがあれば、「きもい」「うざい」などの言葉で誰かが傷つくかもしれないと考えることができ、自然とそのような言葉は飛び交わないと思います。相手の気持ちを汲み取ることが大切だと簡単に言うことはできますが、実際にそれは、生きていく中でとてもとても難しいことでしょう。だからこそせめて相手の何気ないサインに気づいてあげましょう。うれしかったこと、辛いことそしてSOSなどを気づいて声をかけてみる、これこそが勇気をふみ出す大きな一歩となるはずです。この「心が叫びたがってるんだ。」を読んで私の中にこのような考えが芽生えました。私も勇気を出して大きな一歩を踏み、たくさんの人と信頼し合い、お互いに尊重できるような関係を築いていきたいです。そしてこの物語の主人公のように、本当に大切な人に自分の気持ちを伝えられる人になりたいと思います。

優秀賞

「機関車先生」を読んで

電気情報工学科 1年 小西 伶旺

何も言葉を喋ることができない。もし、自分がこんな状態になればどうしているだろうか。

もちろん人と話すことはできない。普通の人にくらべるとハンディキャップがある分、夢や仕事、やりたいことだってままならない。自分に殻をかぶり、何もかにも諦めてしまうだろう。しかし、僕はこの夏ある一冊の本に出会い、その考えは打ち砕かれた。

瀬戸内の小島の、小さな学校にやってきたのは病気が原因で言葉が喋れない先生、吉岡誠吾。体も大きく、口をきかないので機関車先生というあだ名をつけられた。喋れない先生で大丈夫かという声もあった。しかし、次第に子供たち、島民、そして鳥、すべてが包み込まれていくように心の交流を深めていく。

この本を読んでいくと、瀬戸内の小島のきれいな自然と一緒に本の中へと引きこまれる不思議な感覚を覚えた。

僕が一番強く感じたことは、機関車先生の皆を包み込む暖かさ、優しさがあるということだ。彼はただ、喋ることができないだけで他の人には真似できない行動力を持つ人物だ。そして、島の人々に大きな影響を与えていく。あだ名の通り、機関車そのものと言ってもおかしくない。彼が先生として勤める学校は生徒が七人しかいない小さな学校だが、子供たちだけでなく島の人々まで、彼自身が持つ逞しさや優しさが心を通りぬけていくと、僕も心が穏やかになった。

しかし、「機関車先生」は子供たちとのコミュニケーションによるほのぼのした物語ではない。昭和三十年代の空気や日本の社会が持つ独特の様式の中で起きていることは忘れてはいけない。お金に困っている人や、高い金利をつけてお金を儲けていたりする人がいる。その中で彼は、子供たちに世の中には辛いことがあっても勇気を持つことや、本当に強いことは何かということを体で表現する。ここで印象に残る彼の行動がある。それは、彼が喧嘩を売られ、子供たちの前で無抵抗に殴られるという場面がある。その光景を見た子供たちは機関車先生に失望してしまう。だがこの彼の行動は、子供たちに暴力では何も解決しないということを伝えたかったのだと思う。それだけでなく、彼は喧嘩相撲や剣道で正面からぶつかって勝っていき、強いということはただ相手を倒すことじゃないということが子供たちに伝わっていったのだと思う。本当に

すごい先生だ。自分だったらこんな行動はとれないだろう。

これらの場面を読み終えた時、僕の頭の中に一人の先生がいた。それは中学二年生の時の担任だ。先生は、機関車先生のように体が大きかった。悪いことは厳しく怒り、褒める時には、優しく褒めてくれた。先生は僕に、人としてなにが大切なのかなど、多くのことを学ばせてくれた。夏のある時、作文発表の代表に僕は選ばれた。作文を推敲するため先生に何度も見てもらったが何度も「ダメだ」と言って返された。やっと合格がもらえ、発表会が終わった後、何も言わずにぎゅっと抱きしめてくれた。先生はいつも心でぶつかってきた。この出来事を機関車先生の行動と重ねて読んでいたのだと思う。僕が印象に残った部分も、先生との出会いがあったからこそ、その行動が強く残っていたからかもしれない。

最後に、僕は機関車先生から、言葉ではなく行動と責を持つということがどれだけ大切かということ学んだ。僕には将来、人を助けられる商品を開発する偉大なエンジニアになる夢がある。今その夢を叶えるための進路を歩んでいる。この本を読み、必ず実現できるという思いが強くなった。機関車先生からは、言葉がなくても会話ができること、島の人からは、瀬戸内の自然のように暖かい心、子供たちからは、たくましい勇気と強さ。この物語には多くのことを教わるがあった。これは、僕にとっての人生の糧になると思う。高齢化が進む今、社会を支えていくのは僕らだ。だから社会貢献をしなければならない。この本にでてきた人たちのように、様々な困難にも立ち向い、自分の夢に向かって決意と共に走り続けていきたい。

「永遠の0」を読んで

電子制御工学科 1年 松下 晃士

僕は「永遠の0」を読んだ。この小説のあらすじを書く。

主人公、健太郎は祖母がなくなったことをきっかけに戦死した実の祖父、宮部久蔵の存在を知る。そして健太郎は宮部について知るために、フリーライターである姉、慶子と共に宮部を知る人物を訪ね各地を回ることになる。

次に、この小説を読んで感じたこと、考えたことについて書く。小説全体を通して特に強く感じたのは戦争の悲惨さだ。この小説は太平洋戦争に関する数々の文献を参考にしながら書かれていて、戦争の背景や兵器の特徴などの専門的な知識、戦場での生活についての細かい描写などから、戦争の実態を読みとることができる。歴史で習ったときの漠然とした感じではなく、深く理解できたからこそ、改めて戦争の悲惨さについて感じる事ができた。中でも気になった表現が、「何千人が玉砕した戦場であっても、あるいはたった一人の戦死者を出した戦場であっても、遺族にとってみれば、他にかけがえのない家族を失ったことは同じなのです。」という表現だ。この表現には深く考えさせられた。確かにたくさんの戦死者を出した戦いは激戦地としてクローズアップされがちだが、勝利した戦いでも全く死者がいなわけではなく、失われた命の重さは全く同じだと気づかされた。太平洋戦争での日本人の死者数は三百万人以上と言われているので、その数だけ悲劇が起こることになる。三百万なんて想像もできないような数だが、それが現実に起こっていたと思うと信じられないような感じだった。そうした悲劇、悲惨な戦争を二度と繰り返さないためにも、僕たちは戦争について深く学んで理解し、その記憶を後世に伝えていかなければならないと思った。

また、小説を読み進めていくと宮部久蔵という人物について少しずつ明らかになっていく。まず分かったのが宮部が臆病者と言われていたことだ。移動中は敵の奇襲を警戒して見張りを怠らず、乱戦になると戦闘をできるだけ避けて見物していた。また、生きて帰りたいと周囲に漏らすなど、自分の命を惜しむ人物だったことが分かる。今でこそ立派な考え方だが、当時は国のために命を落とすことが美しいとされた時代なので、そう呼ばれていたことも納得できる。そんな宮部だがパイロットとしては一流で、しかも自ら軍に入った志願兵だった。自ら志願してまで軍に入った人がなぜ命を惜しむのか、

もう少し読み進めると分かった。宮部には日本に残してきた新婚の妻がいたのだ。時代に反してはいるが、それでも生きて帰りたい理由としては十分だと思った。その後も宮部は各地を転戦したくさんの操縦士に影響を与える。そこでも宮部は臆病者としての戦い方を徹底していた。ラバウルに転属した時の小隊での部下、井崎には命を二度助け、井崎が自爆攻撃をほのめかした際には胸ぐらを掴んで叱った。こうした行動から、宮部の臆病は生きて帰りたいという願望ではなく、絶対に死ねないという強い信念なのだと感じた。そして宮部は終戦間際、特攻によって戦死する。その出撃の直前、宮部は自分に渡された零戦の不調を見抜く。その機に乗り込んだあとトラブルで帰って来れば、宮部は生き残ることが出来たのだ。しかし宮部はその機を大石に託し、自身はかつて乗っていた旧式零戦に乗り込み特攻で亡くなる。この大石は以前宮部が奇襲された際に宮部を助けた操縦士で、教官時代の宮部の教え子でもある。宮部は大石に家族を頼むというメモを残して自分の命と引きかえに大石を生かしたのだった。この宮部の心情・信念の変化には考えさせられた。あれほど生にこだわっていた宮部が生き残れるかもしれない唯一のチャンスを手放すのだから、宮部自身も零戦に乗ってから離陸までの数分間に色々なことを考えたのだろう。ベテラン搭乗員として各地を転戦するうちにたくさんの仲間が亡くなるのを見てきて、自分だけ生き残ることはできないと思ったのかもしれないし、あるいは大石なら家族のことを託しても良いと思ったからかもしれない。いずれにせよ、宮部の中では辛く悲しい、しかし強い決断があったことは間違いない。

この宮部の生き方から、人は何のために生き、何のために死ぬのかを考えさせられた。人は生まれたときから生きる権利を持っていて、誰もが自由に生きることが最も望ましいことだと思った。その権利を強制的に、しかも多数奪ってしまう戦争を起すことはならない。これは戦争だけでなく、いじめ、労働問題、貧困など生きる権利を侵害してしまう現代社会の問題にも共通すると思う。僕たちは生きる権利について考え、そういった社会問題を解決していかなければならない。

佳作

「くちびるに歌を」を読んで

機械工学科 1年 石田 悠夏

この本は映画化もされていた話題作だったので、興味を持った。

元々、吹奏楽部だったので、ここで描かれる音を合わせる楽しさや厳しさは共感することが多かった。例えば、美人な臨時の顧問を目当てに入部した男子達が、地味な基礎練習に辟易する場面があるが、基礎が大切だというのは全てにおいて当てはまることだと思う。簡単な計算問題が解けなければ、応用問題が解けないように、基礎は重要な役割を担う。

また、部員全員が合唱でまとまっていく中で考えるそれぞれの悩みにも共感することが多かった。例えば、桑原サトルという男の子はコミュニケーションが苦手な友達がいなくて、私も同じようにコミュニケーションが苦手な友達もいない、とはいかないまでも多い方ではない。彼はこんな風に思っている。「たまに話しかけられることがあり、そのようなときは声がでなくて焦った。頭が真っ白になり、どのような返事をすればいいかわからず、言葉が喉の奥でつかえてしまう。」

私も同じようになって、結局気の効いた返事ができずに後悔することになる。しかし彼は、合唱部に入ったことで変わっていく。私も何かをきっかけに変わりたいと思う。また、彼は将来を考える必要がない。自閉症の兄の世話をすることが生まれた時から決まっていた彼自身もそれを受けいれているからだ。しかし、彼が将来について話す部員を羨ましいと思うシーンがある。そのシーンを読みながら私は将来について迷いを抱いている今が、とても贅沢に思えた。当たり前のように自分で決めてきた人生が、とても幸せな人生だったのだな、と感ずることができた。

もう一人、共感したのは仲村ナズナという女の子だ。彼女は元々合唱部で、女子しかいない今までの合唱部が好きだった。過去のことから男子が苦手な代理の顧問目当てで入部した男子たちとは相容れなかった。この気持ちも分かる。今までの環境が変わるのはとても恐ろしい、今まで上手くいっていた部活に苦手な人が、中途半端な覚悟で入ってきたら腹が立つのは当たり前だと思う。

このように、部員の悩みは様々で最初はバラバラだった合唱部が、一つのできごとを乗り越える度にそろって行くのが見どころだと思う。変わったり、乗り越えることで人は成長するのだと改めて感じた。

一番感動したのは、せっかく来たにも関わらず、病気によってホール内で聞けなかった桑原サトルの兄の為にホール外で歌うシーンだった。最初は桑原サトルを含めた三人で歌っていたが、ホール外にいた生徒たちが合唱に入っていく大合唱になった。想像しただけで鳥肌が立つ程だったし、この場面はぜひ映像でも見たいと思った。また、舞台上に立った時に仲村ナズナが言った「わらって」という言葉がすごく印象に残った。

この本を読んで、思い出したことも学んだこともあった。思い出したのは、今自分が歩んでいる人生があたり前ではないことと、自分が大切だと思っている時間はずっと続かないということだった。いつまでも同じメンバーで同じようなことができるわけじゃない分、今のその時間を大切にしたいと思った。

学んだことは、人はいつ何をきっかけに変わるかわからないということだと思う。私も変わるチャンスがあれば、それを逃したくないと思う。

また、この作品では、「手紙～拝啓十五の君へ～」という曲の歌詞が多くでてくるが、改めてこの曲の歌詞を読むと、とても深い歌詞で感動した。普段、何気なく歌っている曲ではあるけれど、歌詞を理解して歌うことで、また違った何かが見えてくるかもしれない。

この本の登場人物が、未来の自分にあてて書いた手紙は、良いことばかりの内容ではなく、悩みも綴られてはいるが、私が十五歳の時に同じように、未来の自分に手紙を書いたとしたら、悩みや辛いことばかりになったと思う。

今からでも、未来の自分に手紙を書いてみたいと思った。

佳作

「余命10年」

物質工学科 1年 足立 美咲

「あと10年しか生きられないとしたら、あなたは何をしますか。長いと思えば悠々と構えられますか。短いと思えば駆け出しますか。あと10年しか生きられないと宣告されたのなら、あなたは次の瞬間、何をしますか。」

私は、小坂流加著「余命10年」という本を読みました。

主人公である高杉茉莉は二十歳の時、過去に十年以上生きた人はいない、つまり余命十年の病気にかかりました。その病気は、国の医療機関が特異で稀な病だとお墨付きまで与えていて、現代の医療技術では治療の方法が見つかっていないうえ、特効薬もなく、ただじりじりと死を待つだけの、怒りや悲しみのやり場もない残酷な病気でした。この本は、そんな茉莉が病気にもがき続けながらも、残された時間をどう生きるべきか考え、それを実行していくうえでの茉莉の気持ちの変化などが詳しく書いてあり、その時の茉莉の気持ちがよく分かる話です。私は、この本のタイトルや帯に書いてある、「死ぬ準備はできた。だからあとは精一杯生きてみるよ。」という言葉がとても気になったので、この本を読みました。

私はこの本を読んでみて、印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、茉莉が、自分の病気はもう治ることが無く、余命十年だと知った時に、「別にいいよ。オバサンになるのなんて嫌だし。丁度いいじゃん。わたしは大丈夫。あと十年で十分だよ。人生なんて。」と言った事です。私は、この茉莉の発言には共感出来ませんでした。理由は、私は十年はとても短く、茉莉の言うように、人生は十年で十分だとは思えないからです。茉莉の言うように、私もオバサンになるのは嫌です。私は今十五歳で、十年経ったら二十五歳です。私の場合、茉莉のように病気をしていなくて普通に十年間を過ごすとしても、これから高専で五年間勉強し、その後進学をしても就職をしても、高専を卒業した時には、私の残りの人生の半分が終わっていることになります。私の考える「十分」とは「悔いの残らないように生活が出来た」という事ですが、この様に自分に置き換えて考えてみた時、私にはあと五年間残っていますが私は、その間に悔いの残らないように生活することは出来ないのではないかと思います。茉莉は学生ではないため、十年間ずっと自由ですが、入院をしないといけなかったり、医者から止められていることもあり、時間も出来ることも限られ

ているので、私が茉莉なら、悔いの残らないように生活が出来るとは思えないからです。

二つ目は、病気の事をずっと打ち明けずに付き合っていた小学校の同級生の真部和人に病気のことを打ち明け、別れた事です。茉莉はまだ和人が好きだったけど、自分に残されている時間が少ない事を知っていたからこそ、和人に幸せになってもらいたくて別れました。私はこの茉莉の行動には共感出来たし、自分も茉莉の立場でも茉莉と同じ行動をとったと思いました。理由は、数年後には必ず死ぬ自分と一緒にいても、始めは幸せだとしても、すぐに終わりが来て、自分が死んでしまった時には悲しませることになります。自分が生きている間、自分が幸せだったらそれで良いのではなく、自分が死んだ後、その人がどんな思いをするかまでしっかり考えなくてはいけないと思いました。なので、自分の好きな人には幸せになってほしいという茉莉の思いはとても共感できました。

三つ目は、二十個の茉莉の思いです。その中で私が一番印象に残ったのは、この感想文の最初に書いたものです。それは、茉莉が余命十年の病気にかかった時に思った事です。私はこれを問いかけられた時、余命十年というのがどのくらいなのか実感がわからず、答えることが出来ませんでした。ですが、この本を読み終わって考えると、答えが出ました。

私はこの「余命10年」という本を読んで、人はいつ死んでしまうかわからないので、一日一日を大切に生き、茉莉のように、夢中になれるものを見つけて挑戦していきたいと思いました。

佳作

ペンギンが「教えてくれた」こと

物質工学科 1年 小島 翼

僕は渡辺佑基「ペンギンが教えてくれた物理のはなし」を読みました。この本を手にとったきっかけはタイトルを見て興味が湧いたからです。最初にこの本のタイトルを見たとき、ペンギンが教える物理ってどういうことかな、と思い、思わず「ん？」と言いつつ本を手に取りました。もちろんこの「ペンギンが教えてくれた物理」というのはあくまで比喩表現であって、ペンギンが物理学を教えるという内容ではありませんでした。それは読む前からわかっていたのですが、実際に読んでそれが比喩であるとわかった時は少しだけ期待を裏切られた気持ちはありました。でもこの本を読んで僕はこの比喩は一般的に言う比喩とは少し違うと思いました。「ペンギンが教える」というのは国語的に見れば擬人法で比喩表現ということになりますが、この本の筆者の言葉を見て例え話ではなく、筆者は自分の研究を通じてペンギン達動物にそれぞれの物理学を教えてもらっていると考えているのだと僕には読みとれました。だから僕は先に言った通り、この本の「ペンギンが教える」という比喩は一般的に言う比喩とは少し違うと感じました。

この本では「泳ぐ」「潜る」「渡る」など動物達の基本的な動きについて各章に分けられ、それぞれ筆者自身の調査体験とそれらから派生する物理学を並べながら解説しています。その中で僕は「飛ぶ」について述べられている第五章が一番興味深かったです。この章では鳥などが「飛ぶ」理由やメカニズムなどについて解説されていました。「飛ぶ」と一言に言っても飛び方はバリエーションに富んでいて、バサバサと翼を揺らして飛んだり滑空するように飛ぶ鳥もいます。これについて僕はこの本を読むまで気づいていませんでした。「鳥はなぜ飛べるのだろう。」こんな疑問は何度も考えましたが、鳥の飛び方なんてこの本を読むまで意識したこともありませんでした。

もう一つ驚いたことがあります。「アメリカ空軍の最新鋭戦闘機が東になってもツバメの機動性にはかなわない。」や「現実の鳥たちに見られる飛行スタイルの多様性は単純な航空力学だけではとてもじゃないが説明できないと私は思う。」という筆者の書いた言葉からわかるように、今の科学でも空を飛ぶ鳥たちに及ばないということです。あれだけ格好良く空を飛んでいる飛行機が、未だに鳥たちの足元にも及んでいないという事実には僕は驚きました。これだけ科学が発達している現

代でも、まだまだ動物たちに「教えてもらわないといけないこと」は驚くほどたくさん残っている、ということを感じさせられました。

この本には先にも書きましたが筆者自身の調査体験も書いてあります。調査中のちょっとしたエピソードや思い出も添えて書かれていたので読みやすかったです。その筆者の調査中のエピソードや思い出の中で僕の心に一番残った話は、筆者自身も一生忘れることのない思い出と言っていたフランスのケルゲレン島での調査の話です。日本とフランスの文化や価値観の違いについての筆者自身の体験談も印象深かったのですが、一番印象に残ったのは筆者がケルゲレンヒメウの遊泳速度のデータを取って調査していたとき、偶然遊泳速度を記録していた記録計のナットが緩んでいて、水中での遊泳速度ではなく空中での飛行速度が計測できてしまったということです。これは「世界で初めて鳥の飛行速度を計測した、とびきりの研究成果になるはずだ。」という筆者の言葉から大発見だとわかります。僕はこれを最初に読んだとき、あまりこの筆者が大発見をしているという実感が湧きませんでした。大発見というのは長年の試行錯誤や研究などの努力によってできるものというイメージがありました。でもこの筆者はそういった努力もあるものの、偶然に偶然が重なって今まで誰もできなかった鳥の飛行速度の計測の方法を発見していました。自分の中の大発見というイメージとは少しずれていて僕はあまり実感が持てませんでした。しかしよく読んで、研究における「偶然」は二字ではとても表わせられない可能性が広がっているということがわかって、ワクワクしました。

僕も将来は筆者とは分野は違うけど同じ研究者になりたいと思っています。だからこの本に学ばせてもらった「動物たちに教えてもらう」というような志を忘れないようにして、研究者を目指して勉学に励みたいと思います。

「レインツリーの国」を読んで

建築学科 1年 勝部 麻衣

私はこの物語を読んで「人を思う」とは? どういうことなのだろう、と考えました。

『気にするしかない人に、そんなこと気にするなよというのむごいです』

「私はあなたに有意義なことを学ばせようとしているのよ、と言わんばかりの正義感が鼻について・・・」どちらも作中の一文です。ドキッとしました。今まで私が良かったと思ってとった言動が相手にとって不快なものだった可能性がある、と思いついたからです。気遣ったつもりの一言が嫌味や余計な一言として相手に刺っかけているかもしれない。その人のためだ、と思った行動は相手からは親切ごかしな押しつけと写るかもしれない、と思うと居た堪れない気持ちがしてきました。少し考えを巡らせてみればそんな言動が表面化した、ともいえる問題も世の中に見受けられるのではないか、ということにも行き着きました。

例えば、最近学校の先生方を悩ませている「モンスターペアレンツ」や「体罰・セクハラ」問題です。我が子をかかわり、痛い思いやつらい思いをしてほしくない、という親心は完全ではないにしろ、分かっているつもりです。でもそれが間違った方向にも進んでいるのは私の気のせいではないはず。私の中学校の部活の先生は私達を「温室育ち」とおっしゃいました。その時は少しだけ反発心がありましたが、続けられた言葉はストンと私の中に入ってきました。それは「いずれは、自分の力で道をつくる時がくる。その時に強風や強い日差しや厳しい寒さに負けてしまっても言い訳はできない。だから今のうちに高い壁にも挑んでいけるようになってほしい。」というものでした。「あの子のため」といって、障害物を先回りして取り除いてしまえば、そこでつまづくことはないかもしれませんが、一人で飛びこえることができなくなってしまいます。それが本当にその子のためになるのかと疑問にもなります。

逆に「思われる側」も気になることがあります。

『最初から分かるはずのないもん「分からんから言うても無駄や」で逃げられたら話をしたい俺は置いてけぼりや。』主人公の言葉です。確かに気になって声をかけた方がいいが、空振りどころかアウトになる時もあるかもしれません。でもその人の優しさや勇気を無視、もっと言えば自分が傷付いたから、と鋭利な言葉で返すなんてことをされれば、声をかけたその人にはたま

たもんじゃありません。

双方の気持ち分かりやすいのが座席ゆずりだと私は思いました。こんな話聞いたことありませんか。電車の座席に座っていたら、老人が停車駅で乗り込んできた。満員だったので「座りますか。」と声をかければ、「年寄りあつかいするな。」と怒鳴られ、カチンときた、という話です。声をかけた人物をAさんとして、Aさんは少なからず「席をゆずってあげた」という気持ちがあったため、カチンときているのだと思います。あくまで相手に取捨選択があるのだからその気持ちは禁物だと思います。老人は「相手は自分のことを何も知らないくせに見た目で勝手に判断された。」と感じて不愉快に思うのだと思います。だからといって、きつく言い返すのは先に述べたように不適切です。注目すべきは第三者の視点です。じっくり見れば、どちらの気持ちも理解できるはず。当事者になって、立場が違った、とたんに相手の気持ちが見えなくなります。それは自分を正当化するのにいそがしくて相手まで目が向かない、とも言えると思います。また、そうなることで自分が「人を思う側」にも「思われる側」にもなるということをお忘れがちになってしまいます。そうすると座席ゆずりのくり返しになるのではないかな、と思いました。

何が本当にその子のためになるのか、結論から言えば誰にも分かりません。分かるはずがないと思います。日常の小さな出来事ふくめてです。それをどうにかしようと思うのなら当事者同士でぶつかり合うしかないのではないのでしょうか。物語りの二人も傷付き、傷付け合いながらも話しを重ね、少しずつ、少しずつ互いを知っていきます。「人を思う」ことはなんてエネルギーを使うのでしょうか。ですが、そうまでして初めて、相手のためになることのヒントが一つずつ分かってくるのではないかな、と思いました。

「思われる側」が「思う側」に体をまかせなくてもなく、「思う側」が独断でひきずっていくでもなく、二人がしっかりと地に足をつけて、手を取り合い、時に少しだけ手をかすような姿が互いにとってベストな思い、思われる関係なのではないのでしょうか。私はこの本を読んで、そんなことを考えました。

佳作

誰かのため～人の優しさ～

建築学科 1年 松田 菜央

「私達はひとりひとり性格も好みも考え方もまるで違うように、ひとりひとりにそれぞれ別の役割があるんじゃないか」

これは、私が読んだ本『か「く」「し」「ご」「と」「』に出てくるエルという女の子が思った言葉だ。そして私がそういう考えもあるのかと思った言葉だ。自分と全く同じ人間はいない。私はひとりひとり違う役割があるからこそ人間は支え合っていけるのだと思った。私もエルと同じように役割があるのではないかと考えた。最初は何も思いつかなかった。でも、私は周りの人を笑顔にするのが好きだ。自分がしてあげたことに対して笑顔になってくれると自分まで笑顔になり幸せな気持ちになる。だから私は人を笑顔にすることを役割と言ってもいいのかもしれないと思った。そのために私は周りをよく観察すること、笑顔でいることを心がけようと思う。

私が読んだ本は高校生五人が主人公でその主人公はひとりずつ違う特殊な能力を持っている。その能力は人の気持ちやなんらかの形で見えるというものだ。だがその能力のことは誰にも言っていない隠し事。友情、恋、進路など高校生でよくある悩みを能力を活用させていながらどうにかしようとしていく物語である。

友達からおすすめされたのがこの本との出会いだった。この本を読み終わった時、私は清涼感を味わった。まるでサイダーを一気飲みしたかのような感覚だった。他にも、友達について改めて考えさせられた。

私が印象に残っている場面は二つある。

まず一つ目は、主人公のうちの一人ミッキーが文化祭の劇で最後の最後にミスをしてしまう。だがその後クラスメートの皆はミッキーに優しい言葉を言う場面だ。なぜなら、ラストシーンの部分でミスしてしまったミッキーを誰も責めなかったからだ。優しい言葉を言うのは当たり前と思う人もいるかもしれない。でも少し文句を言うってしまう人もいると思う。だけど、ミッキーのクラスは笑って許してくれたからだ。もし私がミッキーと同じ立場だったらすぐには立ち直れないと思う。順調に進んでいたものが自分のせいで壊れてしまったと考えてしまうだろう。そんな時にクラスの皆から励まされるのはとても心が軽くなると思う。私は実際にこのような経験をしたことがある。中学一年生の文化祭、私の学校は合唱が伝統である。私はピアノ伴奏を受け持った。文化祭本番、私は普段だったら絶対にミスをしないう部分で

ミスをしてしまった。ステージを降りた後、私は自分のせいで負けてしまったらどうしようと考えていた。そして私は、ネガティブな事を考えすぎて泣いてしまった。そんな時にクラスの皆、さらには違うクラスの人にも励ましてくれた。感謝の気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいになったことを今でも覚えている。この経験から思ったことは、友達は素晴らしいものだということだ。友達がいるだけで毎日が楽しくなる。つらくても立ち続けることができる。自分を支えてくれる友達を大切に、そして私も友達を支えられる人間になっていきたいと思う。

二つ目は、ある日エルが、仲のいい友達京くんを避けるようになった。その理由を京くんの親友ヅカに言う場面だ。印象に残っている理由はエルの勇気に凄いと思ったからだ。京くんを避けていた理由をヅカに言うということは本人も知ることになる。それでも言ったのは京くんのことを本当に大切な友達と思っているからだと思う。その勇気もあったため、エルと京くんは仲直りしてきた。私は中学三年の時、一番仲の良かった友達と喧嘩をしてしまった。そしてお互いを避けるようになった。私はこのままでは嫌だと思いながらも何もすることができなかった。そんな時、友達から謝ってくれた。私はごめんねという気持ちと同時にもっと早く勇気を持って謝っていればよかったという情けない気持ちになった。友達の勇気によって私と友達は笑顔に戻れた。私は、この経験と本を読んで、誰でも友達とのすれちがいはあると思う。でもそこでほんの少しの勇気を出せば、また笑顔に戻れると思った。

私はこの本を読んで、人間それぞれ個性が違ってても周りの誰かといることでお互いを刺激し合うことができる。そして、助け合うことができると学んだ。人の想いというのは簡単ではない。たくさんの想いが混ざりあって悩み、時には傷つくこともある。それでも誰かのために頑張る姿を私は見習いたいと思った。私はこれからも友達と支え合いながら楽しく過ごしていきたい。そして今以上に友達という存在を大切にしていきたい。

2017年度 校内読書感想文コンクール講評

図書館長補 辻本 桜介

はじめに

分不相応にも、今年度の読書感想文コンクールの講評をお任せ頂きました。分不相応というのは、昨年度までの『としょぶらり』を参照すると、どの年度をとってみても、いかにも相応しい感じの先生方が担当されてきたのに、今年度に至って、読書をさほどしない教員が読書感想文の講評を任された点を指してのことです。審査委員の末席を汚した以上、責任を果たしたく思いますが、十分な文章にならないことを恐れます。

昨年度までと異なる重要な点は、審査をできるかぎり客観的なものにするため、審査委員の先生方に審査基準を記した用紙を使って頂いたことです。本コンクールでは、入賞者に対して相当額の図書カードが贈呈されるため、審査に際して、なるべく審査委員の主観を排する必要があるものと思われま

そもそも「読書感想文」とは

そもそも「読書感想文」とは何か、という問いに対し、明確な答えを用意した書物は思いのほか少ないものです。国語辞典の類を捲ってみても、「読書感想文」という項目を用意しているものは殆ど見当たりません。

しかし日本図書館情報学会の『図書館情報学用語辞典』に、「読書感想文」についての定義と思しい記述があるのを見出しました。以下に引用します。

読書指導の中の読後指導の一つで、読後の感想を文章で表現させたもの。読後感を書くことにより、自分の考えを確かめさせることを主な目的としている。書評の一種ともいえる。1955(昭和30)年から毎年行われている全国学校図書館協議会と毎日新聞社による「青少年読書感想文全国コンクール」など、各種の読書コンクールが開催されてきた。読書感想文を強要すると読書嫌いを増やすという批判がかねてから強いが、読書感想文を用いた読書指導が成果をあげてきたことも事実である。

(図書館情報学用語辞典 第4版、

JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com/>,
2017-12-15参照、下線筆者)

これによりますと、読後感を書き留めることによって自分の考えを確かめられる、ということのようですが、なるほど確かにありそうなことと思います。一方で注意されますのは、「読書感想文を強要すると読書嫌いを増

やす」という、逆説的な主張が昔からあるとされる点です。通常、読書感想文を課題として出すことの目的の一つとして、読書の習慣を持たない学生に、(なかば強制的にはなるものの)読書する機会を持たせ、その結果、読書に親しむようになってもらう、ということがあるでしょう。しかし現実には、その逆の結果が生じている可能性もあるというのです。可能性があるというよりは、むしろ、この稿の評者自身がかつて読書感想文という課題によって読書嫌いになったことを考えると、そうした逆説的な批判の方にこそ、かなり説得力を感じてしまうものです。読書感想文には改善の余地も大きいのかもしれません。

とはいえ、実際に学生の皆さんが書いた読書感想文を読みますと、様々な学習上の課題が見えてくるもので、国語科の教員としては有意義なものとも思います。今回評者は約100編の作品に目を通しましたが、ほぼ全ての応募者の作品に、一文が長すぎて読みにくいとか、文字の書き誤り(漢字のみならず平仮名の間違いも時折見受けられる)があるとか、文法的に破綻して不自然な文があるなどといった、手直しをすべき点が見受けられました。書物の内容を肯定的に捉えるか否かや、その結果何を感じたかなどは、学生個々人の内面の問題であり、国語という教科で指導すべきことの埒外ですが、まとまった量の文章を書く訓練を国語科で課題とすることの意義を感じた次第です。

入選作品の傾向

さて、前置きが長くなりましたが、入選作品を概観したいと思います。最初にお断りしておきたいのは、評者は審査委員一人分の持ち点しかなく、今回の入賞者が選ばれる際の決め手が何であったかをお知らせする立場に無いということです。今年度の応募者や、来年度以降の応募者に向けて書くべきことがあるとすれば、それは、他の審査委員の先生方あるいは一次審査を行ってくださった一年生の学級担任の先生方がどのような点を高く評価なさったかについて、評者なりに推量することであろうと考えます。講評としては異例の形になりそうですが、今回は、入賞した皆さんの作品に見られる傾向を把握し、分析を試みたいと思います。それにより、評者自身も、読書感想文というもののあり方について考える機会としたいと思います。では、順に作品の概要を確認してみましょう。

1Mの森田さんは、『永遠の0』を読み、戦時中の日本兵の心情に思いを巡らせています。

1Eの草刈さんは、『心が叫びたがってるんだ。』を読み、相手を罵る言葉を使うことについて振り返り、相手の気持ちを汲むことの大切さについて考えています。

2017年度 校内読書感想文コンクール優秀作品発表

1Eの小西君は、『機関車先生』に描かれる自然風景や、登場人物の「強さ」などを多面的に読み取り、自身の過去のエピソードや将来の展望に考えを膨らませています。

1Dの松下君は、『永遠の0』を読み、戦争では勝敗関係なく命が失われたことに触れ、生き残ろうとした日本兵に視点をクローズアップし考察しています。

1Mの石田さんは、『くちびるに歌を』を読み、登場人物の悩む姿と自分とを見比べながら、今という時間の大切さに考えを及ぼしています。

1Cの足立さんは、『余命10年』の主人公が余命を宣告された後の行動に触れながら、人生について考察しています。

1Cの小島君は、『ペンギンが教えてくれた物理のななし』の示す、物理学にまつわる驚くべき事実に注目し、科学・研究への興味を深めています。

1Aの勝部さんは、『レインツリーの国』の感想文を書き、「人を思う」ということについて思考が重ねられています。人間関係を作るためのヒントがあるように思います。

1Aの松田さんは、『か「」く「」し「」ご「」と「』という変わったタイトルの作品を読み、自分自身の役割について思いを巡らしています。

このようにしてみると、入賞作品には、(1) 登場人物の心情について理解と考察を深めるもの、(2) 作中のエピソードから、自身の生活体験や今後の考えを述べるもの、(3) 戦争等についての理解から生命の尊さを考察するもの、(4) 科学・研究への理解・関心と触発された興味を述べるもの、といった類型があると言えるのではないのでしょうか。

総じて、読後感を率直に書きとめ、そこから考察を発展させていくことが、読書感想文に求められていたと言えるでしょう。そして、その考察の方向性としては、本の内容を何らかの意味で肯定的に受け止め、自身の素養として生かそうとするものであるように思われます。

ただ、評者としては、こうした方向性だけが「読書感想文」の望ましいあり方なのかどうか、判断しかねる思いもあります。例えば、先述の『図書館情報学用語辞典』によれば、読書感想文とは「書評」の一種だとされます。評者が普段目にする「書評」は、研究書に関するものばかりですが、中にはある研究書に対して徹底的に厳しい批判を繰り返すものもあります。それがまた厳しい査読を経た、価値あるものであることを踏まえると、必ずしも書物に対して肯定的評価をすることだけが「読書感想文」のあるべき姿なのではないのかと、疑問を持ってしまいます。

入選しなかった作品に関連して

評者は、国語の授業を担当する1年生電気情報工学科・建築学科の各クラスの応募作品81編を読みましたが、入選しなかった作品の中にも、良い作品がいくつもありました。それらの中で、時折目にしたのが、「展開が下手だった」「飽きる内容だった」というような、作者の表現を批判するものです。少数派であり、今回の入選作品に確実に勝るほどのものがあつたとまでは言えませんが、こうした類の読書感想文が入選することはありうるのでしょうか。

ある説によりますと、読書感想文は、本から学んだことや自分の成長に繋がったことを書き留めるものだから、本を批判する行為は誤りだとされています。この説は、本を批判することを読書感想文の目的からはずすことの明確な理由は示さず、“読書感想文とは本を肯定的に受け止める文章だ”、という定義を持ち出したものといえます。しかし、そのような定義が、誰もがアクセスできる一般的な媒体に書かれていて、誰もが納得するものなのかどうか、誠に疑わしいものです（既述のとおり、少なくとも国語辞典の類には殆ど見られません）。

またある説によれば、学校教育における国語では（特に定期試験や大学受験の国語で）、著者の矛盾や説明不足などを批判する能力は評価の対象とされており、書かれていることを素直に読み取る能力のみが評価されているので、国語という教科の指導内容に含まれる読書感想文において、作品批判という行為は評価の対象にならない、とも言われます。しかし、この説に従うならば、読書感想文の内容は、本に対して中立的でなければならないことになり、本を褒めることも評価の対象にならないはずで

またある説では、入選して別の紙面に印刷された際、悪口や貶すだけの文章が人目に触れるのは好ましくないため、本を批判するのはまずいとも論じられます。しかしこれも、単なる悪口と、論理的に筋道の立った批判とを混同した言い分であり、説得力に欠けるように思われます。

またある説に目を移しますと、読書感想文は主観的に読後感を書くもので、客観的に文章内容を批判することとは区別すべきだ、というものもあります。これは「読後感」を主観的なものに限定しようとするもので、恣意的な考え方と思われま

客観的で批判的な思惟は「読後感」に該当しないのだという言い分は、根拠無く一部の応募者を排除しようとする論理であり、それこそ望ましいものかどうか疑わしいものです。

さらに別のある説を見ますと、本の内容を肯定的に受け止め、そこから新しく生まれた考え方を展開する方が、本の問題点を指摘するよりも深い内容の文章になり、価値

値が生まれるはずだ、としています。しかしこれとても、やはり直観頼みの空説と言わざるを得ません。本の内容を批判的に読むことは、どのような作品が面白く、価値が感じられるかについて、感覚を鋭敏に研ぎ澄ますことでもあります。自分の思考回路や過去の経験を振り返ることにもなります。そうした感想文は深みをもった内容になりにくいのだと決め付けるのは、的外れな気がします。

本来、「読書感想文」という名前の示すものは、“読書した感想を書いた文”であり、広くさまざまな文章を受け入れるべきものと思われます。もし、何らかの“型”というべきものに当てはまる読書感想文のみを高く評価

するならば、そのことをコンクールの要項に予め明記しなければならないでしょう（そのようなことが望ましいかどうか疑問も残りますが）。

若いうちは、様々なものを受け入れる柔軟性を持つべきかもしれませんが、それだけでなく、違和感や落胆といった気持ちを大切に、それを明確に表現する力もまた重要と考えられます。学生の皆さんにいわゆる「クリティカル・リーディング(批判的な読み)」の能力を付けてもらうためには、読書感想文コンクールのあり方を考え直す余地もあるように思われます(たとえば「クリティカル・リーディング賞」を特設するなど)。



表彰式記念撮影（校長室）

2017年度 校内読書感想文コンクール表彰作品【読書感想文の部】

賞	学科・学年・氏名			作品名
最優秀賞	M	1	森 田 紗 代	「永遠の0」を読んで
優 秀 賞	E	1	草 刈 美 帆	「心が叫びたがってるんだ。」を読んで
〃	E	1	小 西 伶 旺	「機関車先生」を読んで
〃	D	1	松 下 晃 士	「永遠の0」を読んで
佳 作	M	1	石 田 悠 夏	「くちびるに歌を」を読んで
〃	C	1	足 立 美 咲	「余命10年」
〃	C	1	小 島 翼	ペンギンが「教えてくれた」こと
〃	A	1	勝 部 麻 衣	「レインツリーの国」を読んで
〃	A	1	松 田 菜 央	誰かのため～人の優しさ～

平成29年度読書会を開催して

米子工業高等専門学校名誉教授 熊谷 昌彦

平成26年度～28年度の3年間に図書館長をつとめ、また最後の1年間はリベラルアーツセンター長を兼務しましたので、平成29年度は僭越ながら中永先生の読書会を引き継いで、学生諸君と共に開催する運びになりました。本選定は読書会の学生メンバーが主体的に選んだものです。

第1回「レインツリーの国」(有川浩著)、第2回「人間失格」(太宰治著)、「侏儒の言葉」(芥川龍之介著)、第3回「キッチン」(吉本ばなな著)、第4回「長い旅の途上」(星野道夫著)、第5回「道化師の蝶」(円城塔著)、第6回「理系バカと文系バカ」(竹内薫著)とつづきました。読書会でなければ自ら読む機会を逸しがちな本が選ばれ、新たな視点をえた1年であったと思います。

是非、次年度には新しいメンバーが加わって、共に話し合う機会をもてればありがたいと思います。

学生時代に読むとためになる本 (教員推薦コーナー)

推薦者:教養教育科教員

書名:クリスマス・キャロル

著者:チャールズ・ディケンズ

世界で最も有名な話の一つです。この話を題材にした映画もたくさんあります。イギリスのヴィクトリア朝時代の作品ですが、人間の本质はいつの時代も変わることがありません。よいクリスマスを送ることがよい人生を生きることにつながっています。専門分野だけでなく、人生の先行研究もしてみてください。

推薦者:建築学科教員

書名:人を動かす

著者:デール・カーネギー

私は就職活動に行き詰っているときにこの本を読みました。

「人を動かす」というタイトルから、人との接し方、リーダーシップ力等に関する内容と思われるかもしれませんが、それだけではない、「人として大事なことは何か」という点に気づかせてくれる1冊だと思えます。

推薦者:建築学科教員

書名:法隆寺を支えた木(NHKブックス)

著者:西岡 常一, 小原 二郎

40年も前に出版された本ですが、内容は色褪せてないと思います。出版された当時、私は高専の4年生でしたが、日本の誇る法隆寺宮大工の家系に生まれた西岡常一の言葉は、示唆に富むものであり、今も記憶に深く刻まれています。技術者のたまごである諸君も本書を一読し、千年以上続く匠の技に触れてみてはいかがでしょうか。

推薦者:機械工学科教員

書名:ゲームの達人

著者:シドニィ・シェルダン作 ;

天馬 竜行, 中山 和郎訳

「読むとためになる本」ではないかも知れませんが、学生時代にシドニィ・シェルダンの本を幾つか読み、それなりに面白かったので紹介します。他にも『血族』、『星の輝き』など代表作がありますのでぜひ読んでみてください。とても読みやすい文章ですぐに読み終わると思います。

推薦者:機械工学科教員

飯嶋 和一 (いいじま かずいち) 作品

「始祖鳥記」:江戸時代の中でも「天明の大飢饉」に代表される暗黒の天明期。あのライト兄弟と同じように、日本にも大空を飛ぶことに憧れた男がいた。その鳥人「幸吉」の空を飛ぶことへの飽くなき挑戦の歴史と、貧しく悲惨な時代にも自らの生き甲斐を求め、生き活きと生き抜いた彼の生き様は人々を大いに歓喜させ、悪政に立ち向かう勇気を与えることになる。絶望を極める時代背景と彼の生き様をコントラストに骨太な文章で綴った傑作中の傑作。彼の直向きさに、心震わせ読了までに落涙すること間違いなし。その他、「出星前夜」など、飯嶋作品には本当に外れがありません。

推薦者:教養教育科教員

書名:悪魔の文章術

著者:樋口 裕一

最近、メールやLINEなど文字で友達、家族、先生などと連絡を取り合うことが多いと思います。文章は相手の心を動かします。もしDAIGOのようなメンタリストが文章を操ったら……。メンタリストは超能力者ではありません。皆さんも、文章をちょっとだけ「工夫する」ことにより「相手の心を操る」「見せたい自分を演出する」力を身につけましょう。だますか、だまされるかは皆さん次第です。

推薦者:教養教育科教員

書名:不思議な少年

著者:マーク・トウェイン

ある小村に現れたサタンという名の少年天使。彼の話す「善悪」は、常識とはかけ離れているものの、否定しがたい説得力と不思議な魅力を持っている。

作者のマーク・トウェインは「トム・ソーヤの冒険」など楽しい作品を多く著した作家であり、この作品も、内容はシニカルでありながら不思議な楽しさがある。

善と悪とは何か。私たちは常識に目を隠されていないか。学生時代に一度立ち止まって考えてみて欲しい。

推薦者:電気情報工学科教員

書名:オイラーの贈物

著者:吉田 武

$e^{i\pi} = -1$ の奇跡! 複素数、数列、微分積分、あまり意味も分からずに学んできたこれまでの数学。この本を読むと、実はそれらが素晴らしく美しい形として繋がっているのが分かります。

推薦者:電子制御工学科教員

書名:タイ人と働く

—ヒエラルキー的社会と気配りの世界

著者:ヘンリー・ホームズ&スチャーター・

タントンタウィー 末廣 昭訳・解説

微笑みの国タイ〜二プラス一のほほえみ〜

派遣専門家としてタイのJICAプロジェクトに参加した折、プロジェクト・リーダーが私の働きぶりを見て、“これがジャパニーズ・スタイル”と、度々、タイの先生方に檄(げき)を飛ばすことがあり、“?”と感じました。それぞれの国には固有の文化や価値観があり、それを尊重し理解する姿勢があってこそ、初めてお互いの距離が近くなり、伴に歩むこともできます。グローバル化の中、異文化理解のヒントとなる良書かと思えます。

推薦者:電子制御工学科教員

書名:朽ちていった命:被曝治療83日間の記録

著者:NHK「東海村臨界事故」取材班著

無知はセンセーショナルリズムに悪用されがちである。技術者ならば、まずは事実を知り、その上で自ら解釈し、言説を主張すべきであろう。私もそう心がけている。

本書は“人は多量の放射線を一度に浴びるとどうなり、どのような医学的処置を受けるか”ということを客観的に追ったドキュメンタリーである。読了には勇気が要るかも知れないが、ぜひ聞きたい。「放射線」は「恐ろしい」?「原発」に「反対」それとも「賛成」?

推薦者:教養教育科教員

書名:話したくなる世界の選挙

～世界の選挙をのぞいてみよう～

著者:コンデックス情報研究所 太田 雅幸 監修

「18歳」に選挙権年齢が引き下げられました。

この本は、日本の選挙とは違いが見られる世界の選挙について取り上げてあります。

例えば、

ブラジルでは16歳になると選挙権を取得できる!

サウジアラビアでは2015年まで女性に選挙権がなかった!?

オーストラリアでは100年近く投票率が90%を超えている!?

アメリカ大統領は1年かかって選ばれる!

韓国ではインターネットを利用した選挙運動が自由!?

タイでは選挙期間中お酒を飲んではいけない!?

推薦者:教養教育科教員

書名:無限と連続:現代数学の展望(岩波新書)

著者:遠山 啓

授業で学ぶ数学は無味乾燥に思われる人も多いでしょう。本書は『本物の数学』を垣間見せてくれます。多くの数学者が取り組んできた本質とは何なのか、数学者の人生も織り込みながら生き生きと描いていきます。読後には数学の見方が変わるかもしれません。

推薦者:教養教育科教員

書名:ガードナーの数学パズル・ゲーム

著者:マーティン・ガードナー

パズルと数学の魅力を明晰・平明な筆致で語り、数十万の読者を魅了したガードナー氏の名コラム「数学ゲーム」。

その後のレクリエーション数学に決定的な影響を与えた金字塔である。

そのコラムを一堂に収め、近年の進展についてもガードナー自身が付記した完全版シリーズの邦訳。

ガードナー氏の死去により、これが最終版となった。

推薦者:物質工学科教員

書名:海の翼(PHP文芸文庫)

著者:秋月 達郎

エルトゥール号はトルコの軍艦で、明治23年に和歌山県沖で遭難した。海岸に近い大島村の住民は、生き残ったトルコ人船員たちを助け出し、自分たちの食料を提供し、献身的な介護をした。それから95年後のイラン-イラク戦争でイラン領内航空機無差別攻撃の予告の中、テヘランに残された日本人救出に向かったのは日本政府ではなくトルコ政府だった。この本は人間としての有り様がいかに大切であるかを感じさせてくれる。読んでいる最中に泣けてきます。

新着図書一覧 (平成29年7月～平成30年1月)

No.	図書名	著者等
1	パーマメント神喜劇	万城目 学
2	工学部・水柿助教の解脱	森 博嗣
3	線形代数キャンパス・ゼミ 改訂5版	馬場 敬之
4	僕はマティス (芸術家たちの素顔6)	キャサリン・イングラム
5	翻訳できない世界のことば	エラフランシス・サンダース(著)、 前田 まゆみ(翻訳)
6	誰も知らない世界のことわざ	エラフランシス・サンダース(著)、 前田 まゆみ(翻訳)
7	働きたくないイチと言葉がわかるロボット 人工知能から考える「人と言葉」	川添愛
8	ZBrushフィギュア制作の教科書	榊 馨
9	2017年度版 工業英検3級問題集	公益社団法人日本工業英語協会
10	2017年度版 工業英検4級問題集	公益社団法人日本工業英語協会
11	〈インターネット〉の次に来るもの 未来を決める12の法則	ケヴィン・ケリー(著)、 服部 桂(著、翻訳)
12	アクセス和辞典	在間 進
13	クラウン独和辞典 第5版 CD付き	濱川 祥枝(監修)、信岡 養生(監修)、 新田 春夫(編集)
14	デイリー・コンササイズ独和・和独辞典 第2版 中型版	早川 東三(編集)
15	難削材&難形状加工のテクニック(でか版技能ブックス)	ツールエンジニア編集部
16	MCのマクロプログラム例題集(でか版技能ブックス)	伊藤 勝夫
17	TOEIC Speaking & Writing 公式 テストの解説と練習問題	Educational Testing Service
18	公式 TOEIC Listening & Reading トレーニングリスニング編	Educational Testing Service
19	公式 TOEIC Listening & Reading トレーニングリーディング編	Educational Testing Service
20	新版 大学生のためのレポート・論文術 (講談社現代新書)	小笠原 喜康
21	論理的思考力を鍛える33の思考実験	北村 良子
22	マジ文章書けないんだけど	朝日新聞ベテラン校閲記者 が教える一生モノの文章術
23	十歳までに読んだ本	西 加奈子、 益田 ミリ、香[ほか]
24	長い旅の途上	星野 道夫
25	月の満ち欠け	佐藤 正午
26	BUTTER	柚木 麻子
27	敵の名は、宮本武蔵	木下 昌輝
28	会津執権の栄誉	佐藤 巖太郎
29	影裏	沼田 真佑
30	現代ポルトガル語辞典(3訂版)和ボ付	池上 岑夫(編集)、 高橋 都彦(編集)[ほか]
31	小学館現代日葡辞典(外国語辞典シリーズ)	ジヤイメ・コエーラ(編集)、飛田 良文(編集)、 Jaime Coelho(原著)
32	血脈の火一流転の海(第3部)	宮本 輝
33	天の夜曲一流転の海(第4部)	宮本 輝
34	花の回廊一流転の海(第5部)	宮本 輝
35	慈雨の音: 流転の海(第6部)	宮本 輝
36	満月の道: 流転の海(第7部)	宮本 輝
37	定番ARMキット&PIC用Cプログラムでいきなりマイコン制御(DVD-ROM付き)	芹 井 滋喜
38	Arduino実験キットで楽ちんマイコン開発	中尾 司
39	習得への情熱—エッセイから武術へ— 上達するための、僕の意識的学習法	ジョッシュ・ウェイツキン(著)、 吉田 俊太郎(翻訳)
40	22年目の告白・私が殺人犯です	浜口 倫太郎
41	つぶやきのクリーム	森 博嗣
42	理工大学院入試問題演習「電気通信メディア編」	姫野 俊一
43	固体物性・半導体物性・プラズマ物性[理系大学院入試問題演習]	姫野 俊一
44	計測・電気機器・電力工学[理系大学院入試問題演習]	姫野 俊一、井上 道男
45	自殺って言えなかった。	自死遺児編集委員会、 あしなが育英会編
46	学校へ行く意味・休む意味: 不登校ってなんだろう?	滝川 一廣
47	やり抜く力: 人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける	アンジュレ・ダックワース(著)、 神崎朗子(翻訳)
48	あきない世傳 金と銀 1~4巻	高田 郁
49	ホワイトラビット	伊坂 幸太郎
50	この世の春 上・下	宮部 みゆき
51	マスカレード・ナイト	東野 圭吾
52	陸王	池井戸 潤
53	鳥に単は似合わない	阿部 智里
54	鳥は主を選ばない	阿部 智里
55	黄金の鳥	阿部 智里

No.	図書名	著者等
56	空棺の鳥	阿部 智里
57	死ぬほど読書(幻冬舎新書)	丹羽 宇一郎
58	書く力 私たちはこうして文章を磨いた	池上彰
59	珈琲の世界史(講談社現代新書)	亘部 幸博
60	SNS時代の写真ルールとマナー(朝日新書)	日本写真家協会(編集)
61	SNSって面白い? 何が便利で、何が怖いのか(ブルーバックス)	草野 真一
62	木質科学実験マニュアル	日本木材学会
63	木材科学講座 4 化学	城代 進(編集)、 鮫島 一彦(編集)
64	忘れられた巨人	カズオ イシグロ
65	遠い山なみの光	カズオ イシグロ
66	浮世の画家	カズオ イシグロ
67	充たされざる者	カズオ イシグロ
68	たゆたえとも沈まず	原田 マハ
69	玉依姫	阿部 智里
70	弥栄の鳥	阿部 智里
71	小説の言葉尻をとらえてみた(光文社新書)	飯間 浩明
72	異常気象はなぜ増えたのか—ゼロからわかる天気のみ(祥伝社新書)	森 朗
73	教養は児童書で学べ(光文社新書)	出口 治明
74	大人の語彙力が面白いほど身につく本(青春新書プレイブックス)	話題の達人倶楽部
75	ハーバード日本史教室(中公新書ラクレ)	佐藤 智恵[ほか]
76	[新形式問題対応]TOEIC(R) L & R テスト 究極のゼミ Part 5 & 6	ヒロ 前田
77	[新形式問題対応/CD-ROM付] TOEIC(R) L & R テスト 究極のゼミ Part 2 & 1	ヒロ 前田
78	英語耳[改訂・新CD版]発音ができるリスニングができる	松澤 喜好
79	1駅1題 新TOEIC TEST文法特急	花田 徹也
80	TOEIC TEST 単語特急 新形式対策	森田 鉄也
81	日本人が知っておくべき「日本国憲法」の話	KAZUYA
82	公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 3	Educational Testing Service
83	1駅1題 TOEIC L&R TEST 読解特急(TOEIC TEST 特急シリーズ)	神崎 正哉
84	TOEIC L&R TEST パート6特急 新形式対抗(TOEIC TEST 特急シリーズ)	大里 秀介
85	超AI時代の生存戦略—シンギュラリティ2040年代に備える34のリスト	落合 陽一
86	キノの旅 the Beautiful World 13~21巻	時雨沢 恵一
87	新装版 虚無への供物 上・下	中井 英夫
88	新装版 匣の中の失楽	竹本 健治
89	φは壊れたね	森 博嗣
90	θは遊んでくれたよ	森 博嗣
91	月は幽咽のデノバイス	森 博嗣
92	夢・出逢い・魔性	森 博嗣
93	風は青海を渡るのか?	森 博嗣
94	デボラ、眠っているのか?	森 博嗣
95	私たちは生きているのか?	森 博嗣
96	青白く輝く月を見たか?	森 博嗣
97	これだけ電力(電験第3種ニューこれだけシリーズ)	山口 隆弘
98	傾物語(講談社BOX)	西尾 維新
99	鬼物語(講談社BOX)	西尾 維新
100	恋物語(講談社BOX)	西尾 維新
101	宝石商リチャード氏の謎鑑定	辻村 七子
102	少年は残酷な弓を射る 上・下	ライオネル・シュライヴァー
103	デルトラクエストI 1~8巻	エミリー ロッジ
104	つばやきのテリヌス The cream of the notes 2	森 博嗣
105	つばねのカトリヌス The cream of the notes 3	森 博嗣
106	ツンドラモンスーン The cream of the notes 4	森 博嗣
107	にぎやかな未来	筒井 隆弘
108	モナドの領域	筒井 隆弘
109	幻想の未来	筒井 隆弘
110	そして生活はつづく	星野 源

No.	図書名	著者等
111	闇の左手	アシューラ・K・ル・ガイン
112	時計仕掛けのオレンジ	アントニオ・バーナブス
113	夜[新版]	エリ・ヴィーゼル
114	犠牲(サクリファイス) — わが息子・脳死の11日	柳田 邦男
115	完璧な病室	小川 洋子
116	寡黙な死骸 みだらな用い	小川 洋子
117	浜村渚の計算ノート 2〜7巻	青柳 碧人
118	私はヒトラーの秘書だった	トラウデル・ユンゲ
119	九十歳。何がめでたい	佐藤 愛子
120	漫画 君たちはどう生きるか	吉野 源三郎(著), 羽賀 翔一(イラスト)
121	君たちはどう生きるか(新装版)	吉野 源三郎
122	アルゴリズムイントロダクション 第3版 総合版(世界標準MIT教科書)	T. コルメン[ほか]
123	Oscillator Circuits: Frontiers in Design, Analysis and Applications (Iet Materials, Circuits and Devices)	Yoshifumi Nishio(編集)
124	広辞苑 第七版	新村 出(編集)

読みたい本を 図書館にリクエストできます。

「読みたい本を探したけど、図書館では見つからなかった」、「面白そうな本の話を知りたいけど図書館にはない」、といった経験がある人は多いと思います。そんな時は図書館「リクエスト図書」の制度を利用してはどうでしょうか。図書館カウンターの記入用紙、あるいは図書館ホームページの図書検索システムから、購入して欲しい図書をリクエストできます。できるだけ要望に応えるようにしていますが、購入できない場合もありますのでご了承ください。

「米子高専古文書の会」活動紹介

「米子高専古文書の会」活動紹介

教養教育科 渡邊 健

米子高専では、教員と市民が本校名誉教授らを交えて地域の資料を読み解く、「古文書の会」が行われて三十年以上になります。平成29年度も活動日を従来通り毎週金曜日とし、郷土史家の中宏さんを助言者として様々な古文書を解説してきました。

今年度は、『文政十年布賀(水谷)代官所日記』『明治五年羽根村役場 御布告書写帳』『今瀬家文書』『鹿島家文書』『小池氏文書』『弘化三年御公用並村所用日記』などを読みました。中には大変難しいものもありますが、参加者が知恵を出し合いながらくずし字を判読し、文書に書かれた内容を考えていくのは楽しいひとときでもあります。資料は参加者の持ち寄りで、大部のものを長い時間をかけ読んでいくこともあります。時に

は論文や研究発表で使う資料の下読みや確認を、この会のメンバーに協力してもらうこともあります。

今年度は米子の旧家である鹿島家の資料を扱うことが多かったのですが、その一部は『米子工業高等専門学校研究報告』53号に、影印・翻刻に解題を付して掲載される予定です。「古文書の会」の活動のために毎週一般ゼミナール室をお借りし、参加する本校教員は時間割の上でもご配慮をいただいているので、地域の歴史・文化研究の成果還元を行うことは大切だと考えております。

今後も本校教員とそのOBが地域の方々と交流し、地域貢献につながるものとして「古文書の会」の活動を続け、その成果を社会に発信していきたいと思っています。



写真「嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」(山陰歴史館蔵)

「身近な植物画」展開催の趣旨報告

米子工業高等専門学校 図書館・リベラルアーツセンター長 布施 圭司

米子工業高等専門学校は平成26年度に創立50周年を迎え、図書館も「どこでも本を読める創造空間」をテーマにリニューアルされました。また、平成28年度にはリベラルアーツセンターが設立されました。社会人として社会生活を送る上で教養が必要なことはもちろん、ものづくりにおいても教養の重要性が主張されています。本校学生の教養を高める取り組みの一環として、本年度は「身近な植物画」展を開催しました。

植物画(ボタニカルアート)は、植物の標本画が起源で、できるだけ忠実に植物の特徴を描くとともに、芸術的な美を表現しようとするものです。南部町在住のボタニカルアート作家のいわたさいこ氏の指導を受けている市民グループによる展示を行い、本校名誉教授 齊藤正美 前校長も参加しました。

地域を活性化するためには、まずは地域の価値・素晴らしさを発見することが必要です。身近なものの価値・素晴らしさが見えているでしょうか。しっかり見ないと分からない場合もあるのではないのでしょうか。描かれている植物はどこにでもあるものが多いです。ふだんにげなく見ているものも、じっくり見ると新しい発見があると思います。

また、市民の方々と交流することで、学生生活では得られない考え方や知識を学ぶ機会にもなります。地域の文化や社会についてよく知ることは、社会貢献や自分の進路選択のために大事です。

デザインやものの製作に緻密で正確にものを見ることは必要ですし、社会が高度化すれば単に効率や生産性だけでなく、芸術的センスも問われることとなります。今後技術者になって行くためには、文化や芸術に造詣が深いことは必須になって行くと思われます。そして技術者ではなくとも、文化や芸術と無縁の生活では無味乾燥な毎日になるのではないのでしょうか。生活の中で文化や芸術を実践することが、日々の充実のために求められていると思います。

「身近な植物画」

主 催：米子工業高等専門学校 図書館・リベラルアーツセンター

共 催：いわたさいこボタニカルアート教室

と き：2017年11月7日(火)～12日(日)

〈火～金〉9:00～17:00 〈土・日〉10:00～15:00

ところ：米子工業高等専門学校 図書館1F交流プラザ

米子市彦名町4448 TEL 0859-24-5028

監 修：いわたさいこ

出展作品「梨の花」



ビブリオバトル高校生大会に参加して 電気情報工学科 3年 種 香夏

私は12月17日に鳥取短期大学で行われた全国高等学校ビブリオバトル鳥取県大会に参加してきました。この大会では合計で9校14人の発表者が集まり予選と決勝が行われました。

私の予選チームはどなたも発表の上手な方ばかりで観覧がとても楽しかったです。本の内容や読んでどう感じたかだけでなく、観覧者の心を掴むような発表の構成や話し方や表情が工夫されていて全く飽きる事がなく発表を聞けました。自分が発表者になる時に参考になる点がいくつもあったので、私も他の発表者のように観覧者を楽しませられる発表がしてみたいと思いました。

決勝は観覧者が多く年齢層も幅広かったのでどんな事を話せば観覧者の方に届くのかとても悩みました。自分の好きな事を好きなように話すのではなく、相手に興味を持ってもらえるように話すというのはこうも難しい事なのかと改めて気付かされました。

今回のビブリオバトルは校外の人の発表を聞き、校外の人に向けて発表する事で新たな視点や楽しさが沢山見付かりました。これからも読書を続け、またビブリオバトルで自分が読んだ本の良さを伝えていきたいです。

祝 全国高校ビブリオバトル県大会・チャンプ本獲得

2017年度 文化セミナー報告

2017年度の米子高専の文化セミナーは、第1回5月28日(日)、第2回6月25日(日)、第3回10月22日(日)、第4回11月19日(日)に行われました。会場は第1回、第2回、第3回が中海テレビセンタービル、第4回が米子高専図書館2階のアカデミックシアターでした。第1回は教養教育科 辻本桜介先生による「古典文法における「…と言ふ」「…と思ふ」の「と」との問題」、第2回は物質工学科 遠藤路子先生による「気をつけたい食品の取り扱い」、第3回は教養教育科 鈴木章子先生による「英語の学習開始年齢と様々な教授法について」、第4回は建築学科 稲田祐二先生による「過去の建物被害から学ぶー来るべき地震に備えるー」でした。各講師の先生方は、パワーポイントやレジュメを用いて、ふだんの研究の成果を分かりやすく、話して頂きました。これからも米子高専は文化セミナーを通して、地域に貢献して行きたいと考えています。来年度も是非ご来場ください。